

Title	其角「雑談集」と尚白
Author(s)	辻村, 尚子
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2006, 40, p. 15-27
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/9444
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

其角『雑談集』と尚白

辻 村 尚 子

はじめに

芭蕉の旅によって蕉風俳諧は大きく展開した。旅先での人々との出会いは、常に新しみを追い求める芭蕉の俳風に影響を与え、また、各地に新たな蕉門俳人の誕生をもたらした。しかし一方で、急速に展開する芭蕉の俳諧に追いつくことができず、蕉門から脱落していった俳人が生まれることになったのも事実である。本稿で取りあげる尚白もまた、そのような俳人として記憶されている人物の一人である。筆者は拙稿「其角と荷兮」〔語文〕第八十六輯、平成十八年六月）において、尚白と同じく、蕉風を離反した俳人として知られる、尾張蕉門の荷兮について、其角の『雑談集』（元禄五年刊）を通して考察し、従来、芭蕉との関係においてのみ評価されてきた荷兮を、其角との関係においてとらえ直すことを試み、あわせて、『雑談集』に注目することで、元禄当時の蕉門の様相をより重層的に理解することが可能であることを指摘した。そしていま、ここに取りあげようとする尚白の名もまた、『雑談集』に見える。其角は尚白についてどのように書き記しているのだろうか。

一、尚白の芭蕉離反

尚白（慶安三《一六五〇》〜享保七《一七二二》年）が芭蕉に入門したのは、貞享二年の春、芭蕉が『野ざらし紀行』の旅の途次、大津に立ち寄った際のことであった。この時に成った、辛崎の松を詠み込んだ芭蕉の発句にちなんで、彼の『孤松』（貞享四年序）は編まれている。芭蕉の最初の旅である『野ざらし紀行』以来の門人として、近江蕉門のなかでは古老として重きをおかれた存在であったが、『猿蓑』（元禄四年刊）期の蕉風を理解できず、次第に芭蕉から離れてゆくことになる。そしてその離反を決定づけたのが、『孤松』につづいて尚白の編んだ『忘梅』（元禄五年序）であったことは、荻野清氏「近江蕉門の分裂と芭蕉」（初出「芭蕉研究」第一輯、昭和十七年二月、『俳文学叢説』昭和四十六年、赤尾照文堂所収）に詳細に説かれているところである。すなわち、『忘梅』に寄せた千那の序文を見た芭蕉が、その序文では不十分であるとして、自ら代作したことから生じた悶着に原因があったとされている（元禄四年九月二十八日付千那宛芭蕉書簡による）。近江本福寺の住職である千那もまた、芭蕉の『野ざらし紀行』の際に、尚白と共に蕉門に入った人物で、尚白とは親交があった。その友人が記してくれた序文を否定されたことにより心証を害した尚白は、芭蕉から離反していったという。総句数五九〇余という、尚白にとっては大撰集であったはずの『忘梅』は、結局、安永六年に蝶夢によって見出されるまで、刊行されることはなかったのである。

その蝶夢の出版した『忘梅』によると、その序文には「元禄五年孟春日 千那」とある。『忘梅』は元禄四年九月頃に編集の最終段階を迎え、元禄五年に刊行される予定であったのだろう。これと、ほぼ同時期に編集され、刊

行されたのが、其角の『雑談集』であった。しかも、其角はその巻頭に尚白の名をあげている。芭蕉との仲が不穩になりつつある尚白の名を巻頭に書き記す、そこにはどのような其角の意図があったのだろうか。

二、芭蕉「辛崎の」句と尚白

『雑談集』上巻は、次の記事で始められる。

一 伏見にて一夜誹諧もよほされけるに、かたはらより、「芭蕉翁の名句いづれにてや侍る」と尋出られけり。
「折ふしの機嫌にては、大津尚白亭にて、

辛崎の松は花より臙にて

と申されけるこそ、一句の首尾、言外の意味、あふみの人もいまだ見のこしたる成べし。其けしき、こゝにもきら／＼とうつろひ侍るにや」と申たれば、又、かたはらより中古の頑作ケンサクにふけりて是非の境に本意をおほはれし人さし出て、「其句誠に誹諧の骨髓得たれども、慥なる切字なし。すべて名人の格的には、さやうの姿をも発句とゆるし申にや」と不審シツしける。答へに「哉とまりの発句に、にてとまりの第三を嫌へるによりてしらるべきか。おぼろ哉、と申句なるべきを、句に句なしとて、かくは云下し申されたる成べし。臙にてと居スられて、哉よりも猶徹したるひゞきの侍る。是。句中の句、他に的当なかるべし」と此論を再ヒ翁に申述待れば、「一句の問答に於ては然るべし。但シ予が方寸の上に分別なし。いはば、さゞ波やまのゝ入江に駒とめてひらの高根のはなをみる哉 只眼前なるは」と申されけり。

伏見での俳諧興行の際、芭蕉の名句を尋ねられた其角は、「辛崎の松は花より臚にて」をあげる。しかし、傍らにいた人は、この句に「慥なる切字」がないことを指摘する。例えば『俳諧埋木』（季吟著、延宝元年刊）は、「発句の切字」として「かなも哉けりけりなむしもなしぞさぞなかなかややはかはこそなりいさいかにいづれいづこいつななどいく誰つぬよ」をあげるが、ここに「にて」はない。その不審に對して其角は、本来ならば発句の切字である「かな」を用いて「おぼろ哉」と詠むべきであるが、それでは「句に句なし」ということで「臚にて」と詠まれたのだ、と応ずる。作法通り、発句の切字である「かな」を用いるのではなく、あえて「にて」と破格の表現を用いたところに、俳諧がある、ということであろう。この理由として其角は、「哉とまりの発句に、にてとまりの第三を嫌へる」ことをあげている。これは、『俳諧埋木』にも、「かな」とめたる発句は、「にて」とまりに多くはいはるゝ物にて侍れば、其第三に「にて」はとめ侍らずとかや」と記されていることである。また其角は、「臚にてと居^スられて、哉よりも猶徹したるひゞきの侍る」とも述べているが、これには『俳諧進正集』の次の記述が参考になる。『俳諧進正集』には、「発句哉留、にてにかよふ事」として、「梅遠く香をやり水の流かな」「水浅く根はふかぜりの野沢哉」「俳諧わらべしき長歌短歌も試筆哉」の三句を掲げ、「右之句、治定の哉に候間、にてに通ひ候。ケ様の句に、第三にて留不仕候。又、発句のかたによりて、哉といふ詞、其たぐひかなと聞えて、疑ふ心に候へば、第三、にて留不苦候。能々発句を吟味、第三肝要ニ候」とある。「かな」という切字を用いたのでは、「治定（完結して言い切ること）」の句ではなく、「疑ふ心」を詠んだ句と理解されてしまう可能性が生じる。そうした句意の揺れをも避けて、「臚にて」と言い切ったのだ、と其角は、芭蕉が「臚にて」の句型にした意図を説いたのである。しかし、後日、芭蕉にこの伏見での模様を伝えたところ、芭蕉

は、自らには其角の説いたような巧んだ心はなく、「只眼前なる」景色をそのまま詠んだだけだ、とおっしゃった、というところでこの一段は終わっている。

当時、この「辛崎の」句の切字が大きな話題を引き起こしたことが、支考の『葛の松原』（元禄五年奥）や去来の『去来抄』（元禄十五〜宝永元年頃成立か）などによっても知られる。「辛崎の松は花より朧にて」句じたいが公にされたのは、荷兮の『曠野』（元禄三年刊）であるが、塩崎俊彦氏「其角『雑談集』と芭蕉」（『山手国文論攷』第十五号、平成六年三月）が「蕉門俳論の諸書が伝えるこの挿話の取材源が其角の『雑談集』にある」と指摘するように、その話題の直接のきっかけを生み出したのは、其角であったと思われる。

さて、ここで注目したのは、それほどまでに影響力を持った其角の『雑談集』の、しかもその巻頭に、問題の「辛崎の」句が詠まれたのが「大津尚白亭」である、と明記されていることである。

芭蕉の「辛崎の」句が詠まれたのは、貞享二年春、『野ざらし紀行』の旅においてであった。つまり、尚白と干那が芭蕉に入門した時のことであった。ただし、この句が詠まれたのが尚白亭であるか、確かな証拠はない。この句を干那に報じた芭蕉の貞享二年五月十二日付書簡には「愚句其元ニ而之句」とあり、また、芭蕉自筆「野ざらし紀行」（鯉屋伝来。『大理図書館善本叢書第十巻 芭蕉紀行文集』昭和四十七年八木書店）にも「湖水の眺望」とあるばかりである。また、『雑談集』刊行以前に刊行された俳書で、この句を収録する、『孤松』（貞享四年序）や『曠野』（元禄三年刊）にも尚白亭についての句であるとの前書等はない。一方、『忘梅』（安永六年刊）に付された蝶夢の序には、「辛崎の松は花よりと聞えしも此家（尚白家）の発句にして其短冊を珍藏せり」とあり、また『夕がほの歌』（幸陀・円入編、享保七年刊。尚白追善集）にも「そのかみ翁辛崎の松は朧と吟ぜしは師（尚白）

が北窓の眺也」とある。しかし、『鎌倉海道』（千梅編、享保十年刊。千那三回忌集）には「去比或ル集に此句の事を記す。湖南尚白亭にての吟と云へり。大キに非也」とあり、この句が詠まれたのが尚白亭であったか、千那亭であったかの論争があったようであるが、いずれも、芭蕉はもちろん、尚白、千那没後の記述であり、いまは問題にしない。なお、水戸純子氏「江左尚白の住所」（大阪俳文学研究会 会報）第二十一号、昭和六十二年九月）に、貞享二年当時の尚白亭、ならびに千那の住した本福寺の位置についての考証があるが、これによっても句の成立場所を決定づけることはできない。「尚白亭にて」と明記したのは其角が最初なのである。

ただし、この其角の記述も、芭蕉発句の成立場所の考証材料としては、信用できるものとは言い難い。拙稿「其角『新山家』の方法」（『近世文藝』第八十三号、平成十八年一月）において指摘したように、其角は『野ざらし紀行』に「大津に出る道、山路を越えて」と前書する芭蕉の「山路来てなにやらゆかしすみれ草」句を、『新山家』（貞享二年成）において「箱根山にて」の句に仕立て上げたという例がある。自身の俳書の編集意図ために、師の作品を自由に使うことを、芭蕉は、其角に許していた風がある。

とすれば、ここでやはり問題になるのは、なぜ、其角はあえて「尚白亭」と記したのか、ということであろう。この記述がなくても、巻頭の挿話の主旨に大きな違いが生ずるとは思われない。また『雑談集』には、元禄四年歳末の奥書があり、この頃編集がなされたことが知られるが、その巻頭になぜ貞享二年の昔に成立した「辛崎の」句に関する挿話を用い出す必要があったのか、という点も疑問である。塩崎氏は前掲「其角『雑談集』と芭蕉」において、そこに奥の細道の旅にある、芭蕉の江戸不在の影響を指摘するが、果たしてそれだけであろうか。この問題に関して其角と尚白との関係からさぐってゆくことにする。

三、其角と尚白

其角と尚白との関係で、現在最初に確認されるのは、尚白の『孤松』（貞享四年序）に、其角の発句が二句、また、同じ年に刊行された其角の『続虚栗』に尚白の発句が二句入集することである。ただし、この時までには両者の直接の交渉があったということは確認されない。しかし、尚白は其角に思い入れがあったようで、『孤松』の巻頭三句目に、其角の「日の春をさすがに霧のあゆみ哉」句を掲げ、その巻尾には、自身の「春の日にいそがぬ蛇のあゆみ哉」という句を掲げて、其角句との首尾呼応を図っている。そうした両者が直接に対面したのは、元禄元年（九月三十日に貞享四年より改元）冬、其角の上京の旅の際のことであった。この旅の様子は、元禄三年に刊行された其角の『いつを昔』によって知ることができる。その『いつを昔』には、

千那に供して父の古郷

堅田の寺へとぶらひけるとて

婆に逢にかゝる命や勢田の霜 其角

という一句が収められており、これによって其角と近江とのつながりが、父が堅田の出身であるということによるものであることがわかる。また、句に詠まれた「婆」とは、其角の伯母である宗隆尼のことであり、今回の旅の目的の一つが、この伯母を訪問することにあつたこともうかがえる（ちなみに其角の「自筆年譜」の元禄元年の項に、「十一月廿二日 宗隆尼卒 於堅田葬八十四」とあり、これによると、この伯母はこの年十一月二十二日に没して

いる)。この伯母との縁もあって、其角は本福寺の住職である千那と交流をもつことになる。其角と尚白との仲を取り持ったのは、あるいは、この千那であったのかもしれない。さて、十一月二十七日、其角は加生（凡兆）とともに尚白亭を訪問し、三吟興行を行っている。

霜月下の七日 尚白亭 醉支枕

闇にとて雪待得たる小舟哉

尚白

橋下寒きともし火の筋

加生

茶師の蔵梢くにかさなりて

其角（以下三吟三ツ物一、省略。『いつを昔』による）

この旅以後も、其角は元禄二年七月には千那宛の書簡で、尚白にも自らの句を伝えるよう、千那に依頼している。また『いつを昔』には先の三ツ物のほか、尚白の発句は八句入集している。同じく元禄三年に刊行された其角の『花摘』にも、尚白の発句は三句入集しており、両者の交流が続いていたことがうかがえる。そうした交流のなかで、いま、注目すべきが、尚白が編集し、『雑談集』と同じく元禄五年に刊行されるはずであった、『忘梅』である。この書については、序文を巡っての芭蕉との一件ばかりが取りあげられることが多いが、其角もこの『忘梅』に關与していたことを序文によって知ることができる。すなわち、その序文には、「……今年集を撰び、根を辛崎の一松に託して忘梅といふ。かの湘臣が汨羅の辺に松を忘れ、今湖南の汀に梅を拏て、武蔵野の遠きさかひまではの句はせけるに、「わすれ梅忘れぬ人の便り哉」と其角何某が許より云をこせたり。誠たふとき歎しき名を留て忘れぬ人の情をみんことも是にしく物なからましとや」と、『忘梅』の刊行を知った其角が、この書に発句を寄せていた

ことが記されているのである。『忘梅』の巻頭は、芭蕉・其角・尚白の発句で占められており、其角は芭蕉に続いて重い扱いをうけている。本書は、『忘梅』という書名にちなんで梅の部が始まっているのだが、この『忘梅』という書名の由来は、序文に「根を辛崎の一松に託して忘梅といふ」とあることによりうかがうことができる。その「辛崎の一松」は、尚白にとっては、芭蕉入門の、さらに言えば近江蕉門成立の記念すべき一句といえる、芭蕉の「辛崎の」句を想起させるものであったことは言うまでもない。ちょうどこれと同じ時期に『雑談集』を編集していた其角が、辛崎の句についての挿話を想起した、その背景には、当時（おそらくは芭蕉との間でも）話題になった尚白の『忘梅』の存在があったと思われる。

「尚白亭にて」と記すことで、其角が積極的に尚白の『忘梅』を応援した、とまでは言えないかもしれないが、この『忘梅』が予定通り元禄五年に刊行されていれば、これと相前後して刊行された其角の『雑談集』の巻頭に、まさにその「辛崎の」句が、「尚白亭」での吟であると明記されることは、尚白にとっては非常に心強いことであつたに違いない。しかし、結局、『忘梅』は元禄当時に刊行されることはなかった。そしてこの時、この挿話は尚白にとって、また別の意味を持つことになる。なぜなら『忘梅』の前作にあたる、尚白の『孤松』（貞享四年序）に芭蕉の「辛崎の」句は、「唐崎の松は花より朧かな 桃青」として収められているのであった。「朧かな」の句型は、『雑談集』において、「句に句なし（二句に俳諧性がない）」と其角が否定していたものである。

芭蕉の「辛崎の」句が、「朧にて」という形に決まる以前に、さまざまな句案のあったことが既に諸注において指摘されているが、貞享二年五月十二日には、「朧にて」の形に定まっていたことは、先にも引いた千那宛の芭蕉書簡に、「愚句其元ニ而之句、「辛崎の松は花より朧にて」と御覚可被下候」とあることによってわかる。千那と

尚白との親交を考えると、おそらくこの句型は尚白にも伝えられたことであろう。それでも、尚白は、「朧かな」の句型を採用し、しかも、芭蕉の前号である「桃青」号でこの句を『孤松』に入集させているのである。

石川真弘氏『続虚栗』考——貞享期蕉風俳諧の姿勢——（初出「大谷女子大國文」第十六号、昭和五十四年三月。『蕉風論考』平成二年、和泉書院所収）には、貞享期の蕉風俳諧の特徴として「かな」止めの句が多く見られることを挙げて、「一般に貞享期の俳諧は、雅語や歌語の使用によって連歌調と評されているが、連歌発句の基本形とされた「かな」止め句型の採用もまた、連歌調を構成する主要な要素であったに違いない」と指摘する。そうした貞享期の「かな」止め句の流行の中で、あえて「朧にて」との句型を千那に伝えた芭蕉の意図について石川氏は『孤松』をめぐって——『野ざらし紀行』の作風に及ぶ——（初出「大谷女子大國文」第十一号、昭和五十六年三月。『蕉風論考』所収）において、「此の書簡を認めた芭蕉の意図は、「辛崎の松は花より朧かな」の下五文字を「朧にて」と改めたことや、「山路来て何やらゆかし葦草」の句の単なる報告にあつたのではない。「朧かな」を「朧にて」と改めることによって連歌調の微温的常識的な表現を棄てて俳意を込めた工夫の跡、及び山路に葦は詠まぬとする歌連歌の伝統を敢えて犯してみる俳諧的姿勢を不すものであり、これを伝える必要があつた背景には、彼等の俳諧の座が新風研鑽に欠くことのできないものであるという自覚が芭蕉にあつたからにはかなならない。」と指摘する。そうした芭蕉の期待に充分応じてゆけるだけの器を、尚白は、残念ながら有していたわけではなかつたのである。

『雑談集』の挿話は、「伏見にて一夜誹諧もよほされける」時のものと記され、直接尚白とは関係がない。しかし、「朧かな」の句型で自らの『孤松』に芭蕉発句を収めた尚白は、「にて」の句型に不審を抱いた「中古の頑作に

ふけりて是非の境に本意をおほはれし人（貞門談林頃の作風に溺れ、伝統通りであるか否かということにとらわれ
て俳諧としての本意を見失った人）」と立場を同じくすることになる。のちに、蕉門の許六が、『俳諧問答』（元禄
十年奥）において「尚白、是も上方の高弟也。師説を久しくへだてたれば、弥旧染の病再発したり。かれが器の鈍
して重き所に、一風面白き胴切たる所あり。師此胴切たる事をたすけて用ひ給へり。今は其筋もわずれたり。たと
へば五人持の石瓶の底のぬけたるがごとし。一年『わずれ梅』と云集を作らんとせし時、師次第に流行し給ふに寄
て、かるみを説り。此かるみに力落て、今に其集ならずして年経ぬ」と述べる、尚白の俳諧に対する姿勢が、この
『雑談集』によっても、うかがえるのである。

おわりに

『雑談集』以後の其角と尚白の關係を見てみると、其角の『句兄弟』（元禄七年序）に、「清句」として尚白の
「おもふ事紺にそめたる躍かな」の一句が入集しているほか、『末若葉』（元禄十年序）にも発句三句の入集が見ら
れる。また、其角の編んだ芭蕉追善集『枯尾華』によれば、元禄七年十月十八日に義仲寺において興行された芭蕉
追善の俳諧興行に尚白も一座しており、また同集に収める、「傷^{シヤ}亡師ノ終焉^ヲ作^レル句 初七日迄」のなかに、尚
白の「しけ絹に紙子取あふ御影哉」句が見える。前掲拙稿「其角と荷兮」においてとりあげた荷兮もそうであつた
が、芭蕉を離反したといわれる人々の名が其角の主催する『枯尾華』の芭蕉追善において見られることは興味深い。
こうしたことから考えても、其角が尚白批判を意図して「辛崎の」句の挿話を『雑談集』巻頭においたと考えるこ
とはできない。其角がその執筆に際し、尚白の『孤松』によって芭蕉の発句が「朧かな」の句型で収められている

ことを確認したということも考えがたいからである。其角が「尚白亭にて」としたのは、『忘梅』の編集を知り、かつて大津で座をともした尚白への心づかいもあって、記したというばかりのものであったのだろう。しかし、そうした其角の思いとは裏腹に、皮肉にも、この挿話は芭蕉の新風を理解し得ぬ尚白の一面を表す内容になってしまったのである。

■ 本稿で使用した主な本文の引用は次のテキストによった。なお、読解の便宜をはかり、私に濁点、句読点を施す等の処置をした箇所がある。

- 『雑談集』……『勉誠社文庫19 雑談集』（昭和五十二年、勉誠社）
- 『いつを昔』・『句兄弟』・『枯尾華』……『宝井其角全集 編著篇』（平成六年、勉誠社）
- 『孤松』……『天理図書館綿屋文庫俳書集成9 誹諧飛東津松』（平成七年、八木書店）
- 『忘梅』……『東京大学総合図書館酒竹文庫蔵本（酒竹四一六五）』
- 『夕がほの歌』……『蕉門珍書百種』（昭和四十六年、思文閣）
- 『鎌倉海道』……『近世俳諧資料集成第二巻』（昭和五十一年、講談社）
- 『誹諧埋木』・『誹諧進正集』……『古典文庫151 季吟俳論集』（昭和三十五年、古典文庫）
- 『俳諧問答』……『古典俳文学大系10 蕉門俳論俳文集』（昭和四十五年、集英社）

（大学院博士後期課程）

SUMMARY

Kikaku's "Zotanshu" and Shōhaku

Naoko TSUJIMURA

Shōhaku (1650-1722) is a haiku poet of Omi. He is famous as a student under Bashō. And there're lots of studies which deal with the relations between Shōhaku and Bashō. However, his writing of "Wasureume" caused his estrangement from the school of Bashō in 1692. At the very same year, Kikaku mentioned Shōhaku in his book, "Zotanshu".

In this paper, I tried investigating the influence of Kikaku upon Shōhaku by making a careful examination of "Zotanshu". This attempt will help us to understand Shōhaku from many different angles.

キーワード：其角，雑談集，尚白，芭蕉，忘梅